

KANGEKI 間隙 vol.27 つちのちのちうち

トーク: 芝滝幸(監督)×小森はるか(映像作家)×小原治(KANGEKI 主宰)



KANGEKI



(小原治さん 小森はるかさん 滝梓さん 米川幸リオンさん 芝裕起さん)

『つちのちのちうち』上映後、会場は大きな拍手に包まれました。ゲストの小森はるかさんが登壇してトークがスタート！



(事前予約で完売したので会場キャパを拡大。51名のお客様が来て下さいました)

小原:『つちのちのちうち』は「芝滝幸」の2作目ですが、ユニットとして一緒に映画を撮ることになったきっかけは？

リオン:コロナ禍に最初のロックダウンで動けなくなった時に暇で「映画撮るか」となって、そのときにこの3人で一本作りました。その制作に満足できたので、もう一本撮ろうと。今見ていただいた『つちのちのちうち』のアイデアが出たのもそのときで、3人で相談しながら「それおもしろいね」「撮ってみよう」と。アイデアが出たら撮る。次の作品もそういうふうにして今進んでいます。

小原:この作品を小森さんにも見てほしいと思ったんですね？

リオン:小森さんの『二重のまち／交代地のうたを編む』という作品に僕が俳優として参加させていただいたんですが、その作品には「映ったもの」と「テキスト」の2つのレイヤーがあって、『つちのちのちうち』もそれと近いことにトライしているので、小森さんはどう見てくれるかなと思って。実は編集段階の最初ではまだテキストがなかったもので、映画にもなっていないところからそれをどうやって映画にしていこうかということにトライした作品でもあります。

小森:今日はよんでいただいてありがとうございます。本当におもしろかったです。どういう順番で作っていったんだろう？と考えながら見ていたので、この映画に最初テキストなかったんだ!?って今聞いてびっくりしました。映っているのはリオンくんのお父さんとお母さんですね？あそこはご実家ですか？

リオン:そうです。2人は僕の両親で、あそこは実家です。ただ僕はあの家に暮らしたことはなくて。僕が大学に進学したタイミングで両親があの場所に引っ越したんです。あるとき僕が実家に帰ろうとしたら「住所変わったよ」と言われて、そこに行ったらあの家があった。(笑)僕にとってはそんな感じの場所です。

小森:すごく近い人を、しかも実家で撮っているのに、生活感も遠く感じる距離感というか、本当のものを見ている感じが全然しないのが不思議でした。そこに詩的なテキストと声が重なって、見えているものがだんだん変容していく。でもその効果がフィクションの方に変わるように利用されていないから見ていて心地よくもあって。あるものにフィクションを重ねていくのは結構難しいことだと私は思っています。本当はそう見えていないのにそう見えているように演出して

しまう怖さもあるし。この作品にもそういう効果は起きているけど、それを見ることへの罪悪感があまりない不思議さを感じました。

リオン:あの家はもともと建築家の方が住んでいて、ご自身で建てた家なんですけど、その方が亡くなって空き家になっていたのを買って、今そこに両親が暮らしています。あそこは僕の地元で、昔はあの家の前を通ったりしていたから、あそこが今自分の家になっているという不思議さもあって。庭がびっくりするぐらい広くて、その庭で両親が今ガーデニングをやっていることもすごく不思議。「わたしの遺灰は庭にあの木の下に撒いてほしい」というテキストを使っているんですけど、あれは僕が父親に直接言われたことなんです。これまででは死んだら海に撒いてくれって言われてたけど、この家に来たら「あの木の下に埋めてくれ」に変わったんですよ。それでガーデニングしている姿を見て、「そっか。墓を作ってるんだ」と思って。



(劇中カット:ガーデニングをしているふたり)

小原:ラストシーンが残す印象について考えていたんですけど、リオンさんのお話を聞いて腑に落ちました。この映画は基本的に人がいる画面と人いない画面で構成されていて…この世のあらゆる映画がまあそうなんだけど(笑)、ただこの映画の特徴は、人がいる画面でも同時にその人がそこにいないときに流れているかもしれない時間と空間が2重写しになってくる。ラストシーンも俯瞰の画面の中にガーデニングをしている両親がいて、その姿はやがて消えても、なんでもない会話は画面の外で続いている。そんなふうに見ていくと、あの庭の木の葉をゆらす風もどこか詩のような雄弁さをたたえてくる。そんな名付けようのない現象を画面に取り出しているのが、この映画の「不在」というものに対するアプローチのひとつ。今ラストシーンを例に出しましたが、そういうアプローチが全編に通っているので、見ているこっちもいろいろ発見があっておもしろかったです。

リオン:うれしい。

滝:この映画を作るうえでやりたかったことのひとつは、映っているものと映っていないものを2枚のレイヤーで重ねることで遠いところからなにかを引っ張ってることが出来たらおもしろいって。あの家は構造からしてすごい特殊で、2棟の家を一個にしているから、ランニングマシンの空間のつくりと、リビングやダイニングの空間のつくりも全然テイストが違う。いろいろちぐはぐ。それで生活感がないようにも見えるけど、その中で2人は2人なりに住みよいように工夫していて。キッチンの棚も自分で作ったり、飾ってある絵もローレンスが自分で描いたもので…

リオン:ローレンスとは僕の父親です。母親はしずか。みんなローレンスとしずかって呼んでるんです。(笑)

滝:自分たちが居心地のいいようにいろいろ工夫しているのを見て、おうちっておもしろいなって撮りながら思っただからこちらも自分たちなりに好きなようにレイヤーを重ねるという作り方をしました。

小森:この映画を撮るためにお二人にはどう説明したんですか？

リオン:2人が生活している様子を撮りたいといったら、お母さんには「そんな撮ってなにが面白いんだ？」と言われました(笑)。そこへテキストを重ねるつもりがあることと、観客がそのテキストを聞くために必要な土壌として2人が暮らしている様子を撮りたいと伝えて。具体的には「時間を撮らせてほしい」と伝えました。こういう姿が撮りたいとは言わず、掃除をしている時間や窓を拭いている時間をカメラで記録するように。



(劇中カット:掃除機をかけているしずかさん)

芝:リオンが両親に向けてカメラを回すと家族ドキュメンタリーになっちゃう。それは僕たちのやりたいことじゃないよねっていう共通認識はありました。2人の生活を撮らせてほしいというオーダーはしているけど、実際はカメラのうしろに僕たち3人がいる。つまりそこに他人(芝と滝)が2人いる。その状態を撮られる側も意識してくれたことがこの作品をよりおもしろいものにしていると思います。今日も見えていいなと思ったのは、2人は俳優ではないので、カメラが今こう置いてあるけど、どう切り取られているのかということは完全に把握していないから、画格の外に出た後もカメラを意識して何かしようとしてくれている。やりについてるんです。そこがチャーミングですごくおもしろい。

小原:ご両親はこの作品を見たんですか？

リオン:見ました。

小原:なんて言ってました？

リオン:お母さんは「(寝ずに)起きてたよ」って言ってました。(笑)お父さんはすごく楽しんでくれて。普段から油絵とか彫刻とかコツコツやってるひとだから、特にフレーミングのことを言っていました。見終わった後、一つ一つカットを止めて、「この線がいい」とか。(笑)

小原:笑。この映画はリオンさんにとって発見があったように、ご両親にとってもそれはあったと思います。この映画の特徴として、人の目を通した世界ではなく、カメラを通して見えてくる人の姿がそこにある。そこには同時に普段の自分の目や体では知覚しきれない日常の姿がありありと映っているのかもしれない。植物に水をやったり、窓を拭いたり、鼻歌うたいながら掃除機かけたり、そこには日常の姿が繰り返されているように見えるけど、実際には繰り返されてい

るんだけど、そのシルエットは日の光の射し方ひとつでガラッと変わったりもする。普段そこに身を置く本人が自覚している以上のことが、この画面にはやはりありありと映っている気がします。

小森:お父さんとお母さんもそこに参加している。自分たちの日常をただ撮ってもらっているということとは違う狙いがお二人にもありそうな感じがしたし、それを本人たちも楽しんでやっている。撮ってる方も楽しんでいるのが伝わる。だから生活を覗き見ている感じが全然ないですよ。

リオン:お母さんはいつものように日本語をしゃべっていたけど、お父さんは撮影している途中から、強くパフォーマンスに英語を出すようになって、

小原:え？(笑)実際にパフォーマンスが上がった瞬間は映ってる？

リオン:ピンポンで友人が訪ねてきて「ヘーイ！」って返事しているところとか。(笑)

小原:あれパフォーマンスだったんだ！(笑)

リオン:マイクの性能を信じてないから、おっきな声出して(笑)。あそこでチャイムを押して訪ねてきた友人の仁田君は今回の撮影を知って遠方から遊びに来てくれて、せっかくなのであいう形で参加してもらいました。そこでの打ち合わせでお父さんから「英語と日本語、この映画の中でどちらも等しく映したい。だからこういう会話はどうか？」と提案があり、仁田君も応えてくれて、あのシーンの会話の内容が決まった。ちょうど撮影期間の中盤あたりだったけど、映る言葉に対してそのような狙いを持っていたのかと知った瞬間でもありました。劇中のテキストが日本語・英語となっているのも、ローレンスのこの考え方による影響が強くあります。



(劇中カット:日本語と英語のテキストがシーンで使い分けられている)

小森:朗読部分のテキストも後からできたという話でしたが、どういうプロセスだったんですか？

リオン:テキストは撮影前に全編分一応できてました。ひとつのシーンにひとつのテキスト、それぞれが独立した物語り性のあるもので。それを基に撮影を行い、編集段階でそのテキストを読み上げる声を録音して重ねてみたけど、テキストの効果としてトゥーマッチで。僕たちが想起した物語的情景を観客もスクリーンに重ねたところで何の意味があるんだろう？と思ってしまった。これならいいほうがいと判断し、その時のテキストは一旦全部無しにして。でもフィクションのレイヤーとしてのテキストはやっぱり必要だったから、「一から振り出しに戻ったので完成をしばらく待ってほしい」と両親に伝えた

ら、お父さんが「僕がテキスト書いていい？」と言ってきました。(笑)

小原:すごい楽しんでる。(笑)

リオン:「いいよ」って言ったら一カ月ぐらいかけて書いてきてくれて。そのテキストは本編では一切使っていないけど(笑)、とても面白かったですよ。すごく詩的で、時間に対しての哲学的なことであったり、それがリフレインされて音楽の歌詞のようでもあって。観客も聞いても聞かなくてもいい感じ。確かにこれならトゥーマッチの問題も全てポジティブに解消される。観客が必要とする度合いに応じて適切にパワーが発揮されるようなテキストが書けたらいいなと思ったので、結果的に大いに参考にさせていただきました。



(劇中カット:空間×テキストのレイヤー構造が本作の特徴のひとつ)

小原:映画作りで小森さんに聞きたいことがあるんですね？

リオン:僕は今回の作品を編集していく中で「映画になっている/なっていない」で判断していたんですけど、小森さんは何を判断に編集を進めていますか？

小森:うーん、難しい。(笑)この作品のようにテキストや声があった場合、映像よりもその声をまず優先するかもしれない。重ねるという意味で、それがちゃんと聞こえているかどうか。そのうえで、見えてるものとの間で起きていることが自分がこうしたいと思ったことじゃないように動きはじめたらおもしろいし、そう思えたら編集もたぶんうまく進んでいくような気がします。『つちのちのちうち』も見ながらそういう感覚は起きていて。全然違う想像力が引っ張られていくというか。それによって、ここで切ろうとか、こっちから声が聞こえてほしいとか、3人が意図して作っているのを感じました。

小原:冒頭何も映っていない画面に時を刻む秒針の音だけがカチカチ鳴って、そこに空間がぼっと現れて、言葉が重なっていく。ときにはその言葉が単なる音として鳴ってる瞬間もあれば、ときにはそれが詩のように世界を開いてきたりする。それによって画面のこだまし方も変われば、空間のいきづかひも変わってくる。視覚と聴覚が影響しあっている世界を独特な形で取り出している作品ともいえる。

滝:この2人のアクションを撮るということではなく、2人も家具と一緒に部屋の一部分としてその空間ごと撮れたらおもしろいと思っていて。音に関しても、フレームの外の音も拾えたらいいなと思ってマイクも3本立てていました。撮ってるときは、これがどういう形になるかイメージできているわけではなかったし、完成して観てもらっている今でもそれが上手く機能しているのかはわかりません。

芝:順番としては映像素材があって編集があってテキストがあって

最後に音でした。「空間を広げたい」そこが僕らが一番思い悩むところで。全編を通して基本的には家の中にカメラがあり、奥行きがすごく抜けていて、奥の方に窓が見えているとか、それによって手前に空間が広がっていたり。そこにはいろんな音が出るものがあった。そこで録った音を素材として、たとえば劇中の音楽部分にだったり、いろんな使い方をしました。

観客とのティーチン

質問1:見たことないようなものが見れて面白かったです。一番最初のシークエンスで時計の秒針の音が入っていましたが、どういう意図なんでしょう？

リオン:ありがとうございます。あのシーンはカット割りの段階から、冒頭の一連のショットで通底するなにか印象的な音がずっと鳴っていてほしいと思いました。今回僕たちが撮りたかったものは2人の生活のある時間と家の時間、その「時間」みたいなことを強く感じてもらえる作品にしたいとも思っていて、それを考えている時にあの時計がカチカチ鳴っていたので、「これだね」って。



(劇中カット:時計の音がカチカチ鳴る中、異質な空間が現れる)

質問2:洗濯機の音、パソコンのキーボードをたたく音、掃除機の音、そうした機械の音が所々登場している一方で、それらが映ってないシーンではガーデニングをしていたり、有機的なものと無機的なものとの動きが凄くコントラストになっているのが気になりました。

小森:気になりますよね。電化製品をすごく見ていたというか、その存在感を感じていた時間でもあって。音もだし、そこに振り付けられている人の身体みたいなことも見えてきて。それが滑稽にも見えるけど、それでも嫌な感じはしない。それが何によって支えられているのか理由はいろいろあると思います。ひとつは植物たち。ガーデニングにしても土を触ったり。そうした有機的な時間が織り込まれている。外の光が真っ白だったりすること、夜のあの印象的な電気とかが行ったり来たりしてるから、電化製品まみれのわたしたちの生活をただ斜めから見ていないやらしさはなく、むしろ心地よささえあると思いながら見ていました。

リオン:電化製品を使っている時間は、演技をしている二人にとっては何をすればいいのかわかりやすかったと思うし、観客にとってもその時間は共有できるものになると思いました。撮影するアクションを選ぶにあたって重要だったのは、スクリーンに映る二人のアクションと、観客が実際の生活の中で取るアクションとが重なってほしいということだったので。

滝:あの家の中には電化製品がどんどん増えていったよね。

リオン:お母さんが電化製品大好きということもあって。(笑)

小森:どんどん増えていってる!?(笑)それをどんなふうに見ていたんですか？

滝:あの家はすごい開放的で。どのカットにも窓が写ってるし、日もすごい入ってくる。そこに機械の音が入ってくるのは新体験でした。

リオン:電化製品って音が面白いし、その音が出ている間、そこになにか余白とでもいうような特殊な時間が立ち現れているようにも感じました。そこへならテキストを挿し込むことができるって思えたり。

小原:なるほど。人工的なものが有機的に動くような瞬間に「映画」のよこびをみつけていく作品ですね。

トークも盛況で予定時間を大幅にオーバーしました。(笑)

リオン:本日は見ていただいてありがとうございました。上映しようと思ったきっかけは、こうした開かれた場で、みんなが好き勝手に思うまんま感想を言えるような場で、映画を見てほしいという気持ちからでした。今回は「間隙」という場所を知れて、ここで上映できたこと、ここで観てもらえたことをとっても嬉しく思っています。ありがとうございました。

滝:右に同じです。

芝:本日はありがとうございました。映画を見るときにスクリーンに影がファンファンファンと走って「なんや？」って最初思ったんですけど、あれ電車ですね。それを感じた時に、この場所でこの影がスクリーンに映ることによって、何回も見てきた映画だけど自分自身違う体験ができました。こういう開かれた場所で上映できたことで、この映画のしかったこと、コンセプトに近づけた気がするし、自分自身の体験としても楽しかったし、これを皆さんと一緒に体験ができたことがすごく嬉しいです。

小森:2021年からこの企画がはじまって、2023年に完成して、いま2025年に上映している。それを今日この場にこれだけたくさんの人が来て下さってみんなで見れたことも含めて、なんか、まだまだこれから続いていくというか、届いてほしい作品だなと思います。上映の場をやっていきましょう。



2025年6月14日 Space&Cafe ポレポレ坐にて (採録・校正:小原治)

【ゲストプロフィール】

芝滝幸(しばたきこう)

芝裕起(しばゆうき)、滝梓(たきあずさ)、米川幸リオン(よねかわこうりおん)の三名からなる映画制作ユニット。会社員／カメラマン／俳優 と各々が異なる領域で活動する中、2020年より自主制作という体制のもと三人での創作を始める。映画制作における全ての行程を協同で進行／決定しており、そこに主だった役割分担はない。これまでに『あっちこっち、そっちどっち』(2021年)、『つちのちのちうち』(2023年)の二本を制作。人間を中心に据えた作劇ではなく、日常というレイヤーに別次元のレイヤー——伝承や民話、超常的な存在、記憶、時間、空間、音、カメラに映るものから映らないものまで——を重ねることによって想起されるフィクションを軸に、そこから映画的な体験が起こることを目標に創作を行っている。現在、三作目の撮影に向けて準備中。

小森はるか(こもりはるか)

映像作家。2011年以降、陸前高田や東北各地で人々の語りと風景の記録から作品制作を続ける。代表作に「息の跡」(2016)、「空に聞く」(2018)、「二重のまち／交代地のうたを編む」(2019)、「春、阿賀の岸辺にて」(2024)など。

小原治(おはらおさむ)

ポレポレ東中野スタッフ。自主映画の映画祭では長年審査員も務め、そこで出会った監督たちと一緒に劇場公開や上映会を企画し、数々の自主映画を観客に届ける。space&cafe ポレポレ坐で映画館の興行とは別の形で自主映画を上映していく企画「KANGEKI 間隙」を2019年にスタートさせる。